

開催地名：宮崎県日向市	
開催日時	令和元年 12 月 1 日（日） 19：00 ～ 21：00
開催場所	日向市中央公民館
語り部	吉田 亮一 （宮城県仙台市）
参加者	自主防災会、消防団、市職員ほか約 300 名
開催経緯	<p>当市では、南海トラフ巨大地震の被害想定が宮崎県内で最大となっており、この地震に備えて、避難タワーや避難山などのハード整備とともに、地域や学校などによる避難訓練の充実、自主防災会や防災士の育成支援などソフト対策にも力を入れているが、自主防災会役員の高齢化や消防団員数の減少など、自衛消防力（防災力）の低下がみられるところである。今回の講演を、是非防災活動の強化につなげたい。</p>
内容	<p>（１）防災の基本とは</p> <p>防災の基本は、立場や役割とは関係なく、自助、共助、公助と全ての人に関係していると思う。「心配ない」、「ありえない」、「大丈夫」、「まさかと思う」、これらは全て人間だけが思うことである。防災は、危機感と想定以上の備えが基本である。全ての責任者は、最大の危機感と想定以上の備えで命を守ることを是非お願いしたいと思う。</p> <p>（２）青少年も参加できる地域防災を</p> <p>私は、町内会防災アドバイザーとして平成 18 年から活動している。現在では、全国で防災に関する講演を行うと同時に、各地の学校で防災教室も実施している。そこでまず提言したいことは、地域防災には幼稚園から高校生まで、つまり、幼児から青少年までを関わらせることが大切ということである。地域の中には保育園、小学校から高校もある。しかし、地域防災避難訓練は町内会がメインであり、子どもは参加しない。地区の住民全てが関わって、はじめて地域防災と言える。また防災には、自助・共助・公助がある。地域防災が公助だとすれば、自分で意識して行うのが自助である。個人として、家の耐震化とともに家具が倒壊しないかのチェック、一週間分の食料の備蓄、こまめなガソリンの補充などを心がけてほしい。</p> <p>また、共助の点では町内会において、平成 18 年からの取組として、危険箇所などを記した地域防災マップや防災マニュアルを策定し、全世帯に配布した。さらに、防災勉強会や昼・夜両方の防災訓練を行った。</p> <p>（３）避難所には種類がある</p> <p>東日本大震災が発生したときに新たに気付いたことがある。避難所にはさまざまな種類があるが、それが知られていないということである。避難所には、一</p>

時避難場所、地域指定避難所、広域避難場所、広域避難所、福祉避難所があり、それぞれ用途が異なる。このことを地域住民に周知させることが大切である。私のいた避難所に寝たきりの方が避難されていたので、福祉避難所に連絡をしてそちらへ移っていただいた。

また 避難所の設営に関しても改善点を見出した。それは、ブルーシートの敷き方である。ブルーシートを一面に敷いてしまうと、人をまたいで外へ出なければいけない。そこで今後は、シートの縦横に通路を設けた半島型避難スペースとし、地域ごとに滞在することを提案したい。

(4) 東日本大震災時の小・中学生の活躍

町内会では、早くから自主防災組織を立ち上げていた。災害時には、消火班、救護班、救出班、避難誘導班、給食・給水班、報告連絡班、警備班といった役割に、それぞれ人をあてる必要がある。なるべく多くの人が、それぞれの仕事に慣れていることが望ましい。

また毎年9月に防災避難訓練を行っているが、小・中・高校生も参加させ、なんらかの役割を分担してもらっている。その理由は必要に則したものである。被災後、大人は職場の片付けに行く。避難所に残るのは主に小・中学生など義務教育の児童になる。彼らがさまざまな役割を担うことになるのだ。幸い、地域では児童がよく訓練されており、東日本大震災時も避難所の体育館に率先して柔道で使う畳を敷いたり、2部しかなかった新聞を壁に貼り出すなど、それぞれが活躍してくれた。



開催地より

講演を聞いて、地区自主防災会と小・中学校、皆が地域の一員であることを踏まえて、地域防災の在り方についてしっかり考えたいと感じた。実際に被災経験のある方からのお話は、受講者にも高い関心を持って聞いていただくことができ、防災意識の普及啓発に大いに役立った。